

平成 21 年 4 月 30 日現在

研究種目：基盤研究(B)
 研究期間：2005～2008
 課題番号：17360306
 研究課題名（和文） 旧村野藤吾所蔵資料を用いた村野藤吾の建築についての総合的研究
 研究課題名（英文） A study on the architecture of Togo Murano on examination of the original Murano Archive
 研究代表者
 石田 潤一郎（ISHIDA JUNICHIRO）
 京都工芸繊維大学・工芸科学研究科・教授
 研究者番号：80151372

研究成果の概要：

本研究は、京都工芸繊維大学が所蔵する村野藤吾の図面資料を用いながら、村野の建築作品の設計背景や設計経緯、形態の由来、意匠の特徴などを考察し、総合的に村野の建築作品の研究を試みるものである。年度ごとに、「村野藤吾の公共建築」、「文化遺産としての村野藤吾作品」、「晩年の村野藤吾」、「村野藤吾のアンビルト作品」というテーマを設け、テーマに即した建築作品を選び、調査および考察を行った。

結果として、図面資料の整理を進めながら、村野の建築作品の豊饒さを検証できた。公共建築に見られる村野ならではの設計手法、文化遺産として評価される村野作品に見られる造形的豊かさ、晩年の村野作品の自由さと手作りの側面、戦争など時勢により断念された知られざるアンビルト作品などについて、図面資料ならではの新たな知見も多数得られた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	2,500,000	0	2,500,000
2006年度	1,800,000	0	1,800,000
2007年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2008年度	1,900,000	570,000	2,470,000
年度			
総計	8,000,000	1,110,000	9,110,000

研究分野：近代建築史

科研費の分科・細目：建築学 ・ 建築史・意匠

キーワード：(1) 近代建築 (2) 村野藤吾 (3) 図面 (4) 京都工芸繊維大学 (5) 美術工芸資料館

1. 研究開始当初の背景

本研究のメンバーが所属する京都工芸繊維大学では、1997 年以来断続して、日本の近現代建築の巨匠である村野藤吾が作成した建築関係の図面・スケッチ類約 55,000 点、また村野所蔵図書類約 3,000 点などについて

村野・森建築事務所から寄贈を受け、継続的に整理や保管作業を行っていた。

1998 年には京都工芸繊維大学の数名の研究者らが中心となって「村野藤吾の設計研究会」を設立した。京都工芸繊維大学美術工芸資料館が所蔵する村野の図面資料を用いて研究を行なう組織である。当初西村征一郎同

大学教授が研究会の委員長を務めたが、2004年度より同美術工芸資料館竹内教授が務め、図面整理や研究を進めていた。

村野藤吾は、日本の近現代建築の巨匠の一人とされ、その作品や思想は広く紹介されてきた。しかし、それは建設された建築物や、作品集や雑誌などのメディアに載せられた村野の言説を通じてのものが多い。村野の作品がどのような思考過程、制作過程を経て生み出されたのか、作品の意匠やディテールがどのような特性をもつのか、といった「創造の現場」に基づいた村野の建築の特質については、明らかにされていなかった。

そこで本研究は、京都工芸繊維大学美術工芸資料館が所蔵する村野藤吾の図面資料を基に、従来にない「創造の現場」に踏み込んだ総合的な研究を行なうことを意図して計画された。

村野については不明な部分が多く、神話化された部分も多いが、本研究の成果は、新たな村野像を提示することが予想された。村野の建築の新しい価値を見出すことは、近代建築史研究上においても重要である。また村野の建築は、2003年に発表された DOCOMOMO JAPAN の100選において、丹下健三の6作品に次いで5作品が選ばれており、それらの建築の価値を特定する上でも欠かせない作業であり、社会的にも重要な研究だと言える。こうした背景のもとに、研究が開始された。

2. 研究の目的

本研究は、現在は京都工芸繊維大学美術工芸資料館が所蔵する、村野藤吾旧蔵の図面・スケッチ類を活用して、村野藤吾の建築作品や建築思潮、作品制作のあり方を総合的に探るものである。

具体的には、約50,000点の図面・スケッチ類のうち、これまでの京都工芸繊維大学での作業で未整理の約27,000点の整理を続け、また新たにデジタル情報化作業を行いながら、毎年テーマを決めて、そのテーマの下に図面・スケッチ類を用いた設計過程を解明し、また図面資料から村野の設計思想などを分析することを目的とした。

図面資料という村野の作品制作の痕跡を辿りながら、村野が建築をどのような過程を経て制作していたか。村野の建築思想がどのような思想の影響を受け、どのように形成されたか。村野が他の建築や芸術からどのように影響を受けながら作品を制作したか。また戦時中には仕事がなく「晴耕雨読」していたとも言われるが、現実には複数の図面が残されており、実際にどのような経緯で、どのように仕事をしていたのか。こうしたことの解明を目的とするものである。

3. 研究の方法

研究は、漠然とした形では進められないため、毎年テーマを設定し、そのテーマに沿って作品を10作品ほど選定し、その図面資料整理を行いながら、村野藤吾がその作品の設計に至る経緯や設計過程、建物の現況調査、意匠分析、設計思想分析などを進めた。本研究1年目の2005年度は「村野藤吾の公共建築」をテーマとし、2006年度は「文化遺産としての村野藤吾作品」、2007年度は「晩年の村野藤吾」、2008年度は「村野藤吾のアンビルト作品」とした。

2005年度の「村野藤吾の公共建築」では、従来商業施設や民間建築の作品が多いとされてきた村野藤吾の公共建築に焦点を当てた。対象とした作品は、八幡市立図書館(1957)、米子市公会堂(1958)、八幡中央公民館(1958)、小倉市中央公民館(1959)、横浜市庁舎(1959)、尼崎市庁舎(1962)、日本道路公団 名神高速道路 栗東・大津・京都・茨木(1963)、愛知県森林公園センター(1965)、宝塚市庁舎(1980)である。

2006年度の「文化遺産としての村野藤吾作品」では、2005年度と2006年度に相次いで村野藤吾作品が国の重要文化財に指定されたのを受けて、各地で文化財として評価されている村野作品をテーマとして、現在の保存活用状況などとともに考察した。対象とした作品は、森五商店東京支店(1931年)、宇部市民館(1937年)、大庄村役場(1937年)、世界平和記念聖堂(1953年)、都ホテル佳水園(1959年)、早稲田大学文学部校舎(1962年)、日本生命日比谷ビル(1963年)、甲南女子大学(1964年)、千代田生命本社ビル(1966年)、西宮トラピスチヌ修道院(1969年)である。

2007年度の「晩年の村野藤吾」では、1970年代から80年代にかけての村野の晩年の作品に焦点を当て、その自由な意匠のあり方や村野の理念を探った。対象とした作品は、箱根樹木園休息所(1971年)、日本興業銀行本店(1974年)、小山敬三美術館(1975年)、西山記念会館(1975年)、箱根プリンスホテル(1978年)、松寿荘(1979年)、八ヶ岳美術館(1979年)、新高輪プリンスホテル(1982年)、谷村美術館(1983年)、都ホテル大阪(1985年)、京都宝ヶ池プリンスホテル(1986年)、三養荘新館(1988年)である。

2008年度の「村野藤吾のアンビルト作品」では、計画され設計はされたが建物として実現しなかったアンビルト・プロジェクトをテーマとし、知られざる村野作品を探った。対象とした作品は、ダンスホール(1933年)、大阪メトロポリタンホテル(1933年)、西川商店(1937年)、川崎会館(1937年)、中山製鋼所附属病院(1937年)、宇部ゴルフクラ

ブハウス（1937年）、大丸元町食堂（1938年）、宇部油化工業（1940年）、樞原丸（1940年）、宇部図書館（1949年）、宇部鉱業会館（1949年）、八幡製鉄労働会館（1950年）、飯田家納骨堂（1951年）、東京都庁舎（1952年）、福岡文化センター公会堂（1959年）、志摩グランドホテル（1973年）、晴山ホテル（1976年）、文京学園仁愛講堂（1984年）である。

これらの作品を事例として、図面資料整理を進めながら、村野がその作品の設計に至る経緯や設計過程、建物の現況調査、意匠分析、設計思想分析などを進めた。

4. 研究成果

2005年度の「村野藤吾の公共建築」では、次のようなことが明らかになった。

村野の建築は、モダニズムに則りながらも、装飾や様式性を備えるなど、通常モダニズム建築には見られない側面が見られる。公共建築についても、他の村野の建築と同様に、装飾や様式性を備えるなどの特徴が見られた。つまり村野が民間と公共の区別なく、建築に取り組んでいる様子が確認できた。では、村野にとっての公共性はどこに形象化されているか。それは庁舎建築に読み取れた。村野は生涯に4つの庁舎建築を設計しているが、いずれも市民ホールなどの市民のための空間のあり方に特徴がある。特に戦後の庁舎建築では、丹下健三が提示したピロティ式の開放的な市民のための空間が一般的であるが、村野のそれは、屋内の奥まった位置に巨大な居室のようなデザインで作られている。これらは、ヨーロッパの庁舎建築によく用いられる、いわゆるブルヘルザール（公民室）の影響だと考えられる。つまり村野は、丹下とは異なり、ヨーロッパの伝統に基づいて戦後の庁舎建築の市民のための空間をデザインしたと考えられ、そこに村野の特徴が表れている。

これらの成果は、展覧会を開催し（第7回村野藤吾建築設計図展「村野藤吾と公共建築」、会期：2005年11月27日～12月25日、於：京都工芸繊維大学美術工芸資料館）、公表した。新たに製作した模型や多比良敏雄の写真などと合わせて、図面・スケッチ類を展示した。展覧会に合わせて図録を刊行し（『村野藤吾建築設計図展カタログ7』）、本研究の研究代表者および分担者が調査・考察の成果をまとめた。また、同じテーマでシンポジウムを開催し（会期：2005年12月3日、於：京都工芸繊維大学、パネラー：高橋航一、鈴木博之、石田潤一郎、中川理）、多数の来場者を迎えた。

2006年度の「文化遺産としての村野藤吾作品」では、次のようなことが明らかになっ

た。

近年、国の重要文化財や国の登録文化財になるなど、文化遺産として社会的に評価されている村野の作品は、いずれも村野が渾身の力を込めて設計したものであり、竣工当時から話題になったものが多い。また、地元の名士らに支えられて実現したことも特筆に値するだろう。たとえば国の重要文化財である渡辺翁記念会館では、ロシア構成主義的なモダニズムと様式建築とアールデコが混ざりあったような独自の意匠が目立ち、竣工直後から建築界で話題になった。それは宇部の街の発展に寄与した渡辺の先見の明によって、まだ無名に近い村野に設計が依頼されて実現したものである。また国の登録文化財となっている大庄村役場は、モダニズムでありながらも随所に装飾を備えたものである。また塔を備え、南側に回廊で囲まれた広場を有していること、また図面資料からは設計初期段階で、広場から建物に入ることが計画されていたことが分かるなど、村野の1930年のヨーロッパの遊学で訪れその後の村野に大きな影響を与えたストックホルム市庁舎との類似性を読み取れる。そしてこの庁舎は、竣工当時から「これが村役場か」と言われるほど注目された。

このように、現在文化遺産として評価される村野の作品には、それぞれに、竣工時から様々なエピソードに満ちているが、加えて、現在でも地元の人々に親しまれ、行政などの理解も得られていることも特徴である。先の渡辺翁記念会館では大がかりな修復工事がなされ、大庄村役場は、現在は尼崎市立大庄公民館として広く市民に活用されている。また当初千代田生命本社ビルとして建設された建物は、千代田生命破たん後に改修され、現在は目黒区総合庁舎として活用されている。それは、村野の建築作品が、単なる機能主義や合理主義に終わらない豊かな建築作品であることに由来しているといえるが、それが竣工時から現在にいたるまで保たれていることが、文化遺産として評価されていると言える。

これらの成果は、展覧会を開催し（第8回村野藤吾建築設計図展「文化遺産としての村野藤吾作品」、会期：2006年11月27日～12月22日、於：京都工芸繊維大学美術工芸資料館）、公表した。新たに製作した模型や多比良敏雄の写真などと合わせて、図面・スケッチ類を展示した。展覧会に合わせて図録を刊行し（『村野藤吾建築設計図展カタログ8』）、本研究の研究代表者および分担者が調査・考察の成果をまとめた。また、同じテーマでシンポジウムを開催し（会期：2005年12月9日、於：京都工芸繊維大学、パネラー：藤森照信、堀勇良、石田潤一郎）、多数の来場者を迎えた。

2007年度の「晩年の村野藤吾」では、次

のようなことが明らかになった。

晩年の村野の作品は、いずれも従来から見られる様式性や装飾性に加えて、自由な曲線や古今東西を問わずに様々なデザイン要素の引用が見られることに特徴がある。しかし、それらが完全にモダニズムから離れているとも言えない。そのデザインは常に抽象化に支えられており、基本的にモダニズムの方法に則っている。また、細部のデザインには、日本の伝統的な建築のデザイン手法が見受けられるのも大きな特徴であろう。この時期の村野の図面資料から明らかになるのは、こうした建築作品が従来に増して手作的に造られていることであろう。図面には、概略の線が描かれるが、「詳細は模型で」とか「詳細は現場で」といった村野によるメモが書かれている場合もある。加えて、模型製作に粘土が用いられるようになり、従来図面を修正するにはトレーシングペーパーに書かれた線を消して、その上から新たに描いていたのだが、この時期には青焼き図面の上から鉛筆や赤ペンで修正をするという方法が用いられるようになる。溢れるように出てくる晩年の村野のイメージを設計図面に置き換える際の合理的な方法だと言えるが、図面の描き方にも変化が生じているのは、従来知られていなかった興味深い点だと言える。

また日生劇場や西山記念会館については、設計プロセスを追い、時系列に沿って分析を試みた。紆余曲折しながらも、ある段階に大きなアイデアが提示されて、完成に向けてまとめられる傾向も読み取れた。

これらの成果は、展覧会を開催し（第9回村野藤吾建築設計図展「村野藤吾・晩年の境地」、会期：2007年11月27日～12月22日、於：京都工芸繊維大学美術工芸資料館）、公表した。新たに製作した模型や多比良敏雄の写真などと合わせて、図面・スケッチ類を展示した。展覧会に合わせて図録を刊行し（『村野藤吾建築設計図展カタログ9』）、本研究の研究代表者および分担者が調査・考察の成果をまとめた。また、同じテーマでシンポジウムを開催し（会期：2007年12月8日、於：京都工芸繊維大学、パネラー：長谷川堯、神子久忠、石田潤一郎）、多数の来場者を迎えた。

2008年度の「村野藤吾のアンビルト作品」では、次のようなことが明らかになった。

対象として取り上げた18作品のうち、9作品が戦前のものである。調査により、戦前の作品の多くが、日中戦争の勃発による1937年10月から始まる建築資材の統制によって建設を断念せざるを得なくなったり、大幅な変更を余儀なくされたものであったりしたことが判明した。戦前に数多くの豊かな建築作品が構想され、しかも詳細図や構造図まで揃っていたにも関わらず、戦争がその実現を絶ってしまったのである。戦中の村野は満足

な仕事を得られなかったとされるが、それは数多くの豊かな作品群を断念した結果のものであったことが明らかになった。

アンビルト作品と言えば、欧米ではしばしば建築家が純粋な意図や思想を表現するために、実現しないことを前提に提示される。しかし村野の場合、すべての作品が実現を前提として設計され、諸事情により断念されたものがアンビルト作品になったものであった。村野が理念よりも社会の中でのリアルな建築を求めていることが、従来とは別の形で裏付けるものだと言える。しかしそうであっても、村野によるアンビルト作品が決して純粋さや理念を欠いた無意味なものであるわけではないだろう。戦中に実現を断られた作品が象徴しているように、村野のアンビルト作品は、村野に別の方法や足跡があり得た可能性を暗示している。あるいはまた、それらは未知の豊かな村野の創造性や、知られざる施主との関係を浮き彫りにしてくれる。図面資料としてしか残されていないアンビルト作品から明らかになることは数多いと言える。

これらの成果は、展覧会を開催し（第10回村野藤吾建築設計図展「アンビル・ムラノ」、会期：2008年11月25日～12月26日、於：京都工芸繊維大学美術工芸資料館）、公表した。新たに製作した模型と合わせて、図面・スケッチ類を展示した。展覧会に合わせて図録を刊行し（『村野藤吾建築設計図展カタログ10』）、本研究の研究代表者および分担者が調査・考察の成果をまとめた。また、同じテーマでシンポジウムを開催し（会期：2008年12月6日、於：京都工芸繊維大学、パネラー：福田晴虔、宮本佳明、石田潤一郎）、多数の来場者を迎えた。

本研究の全体を通じて、村野の建築作品の豊饒さをいくつかの角度から検証できた。公共建築に込められた村野の意図、また文化遺産として評価される村野作品の時代を超えた豊かさ、晩年の村野作品の独自の自由さ、アンビルト作品に読み取れる、知られざる村野の創造力。村野は自らの作品について語らない建築家だと言える。建築作品の形態がなぜそのような形態をしているのか、どのような経緯を経てその形態が生み出されたのかなど、謎は多い。しかし、図面資料を通じて村野の建築作品に接することで、わずかではあるが、村野によって語られていない村野作品の謎に迫ることができたと言える。

今後の課題として、図面資料の整理の継続、同様の考察を行う作品の拡大に加えて、意匠の継承や転用の方法の分析など、図面資料に基づいたより詳細な考察、加えて未発表作品の調査などが挙げられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 11 件)

- ①笠原一人、学界短信 「第十回村野藤吾建築設計図」展、建築史学、第 52 号、2009 年 3 月、pp. 85-86、査読無
- ②石田潤一郎、村野邸—〈自邸〉という試行錯誤の集積—、住宅建築、第 400 号、建築資料研究社、2008 年 8 月、pp. 32-43、査読無
- ③笠原一人、解題—村野のデザインエレメントを因数分解する—、住宅建築、第 400 号、建築資料研究社、2008 年 8 月、pp. 44-63、査読無
- ④角田暁治・福原和則・竹内次男、西山記念会館における村野藤吾の設計過程に関する研究、日本建築学会計画系論文集、第 627 号、日本建築学会、2008 年 5 月、pp. 1147-1154、査読有
- ⑤福原和則・竹内次男・石田潤一郎、京都工芸繊維大学美術工芸資料館が所蔵する村野藤吾の設計図面—アーカイブ整備方法と資料の特徴について—、DOCOMOMO Japan NSC Technology 研究発表論文集、2008 年 5 月、pp. 137-142、査読有
- ⑥角田暁治、谷村美術館における村野藤吾の設計プロセスと空間表現、DOCOMOMO Japan NSC Technology 研究発表論文集、2008 年 5 月、pp. 184-189、査読有
- ⑦笠原一人、アーカイブス活動の現状 京都工芸繊維大学美術工芸資料館所蔵 村野藤吾図面資料、建築雑誌、第 1576 号、2008 年 5 月、p. 16、査読無
- ⑧笠原一人、村野藤吾とそのアソシエイツが遺した図面資料 2、すまいろん、第 84 号、2007 秋、pp. 60-61、査読無
- ⑨竹内次男、村野藤吾とそのアソシエイツが遺した図面資料 1、すまいろん、第 83 号、2007 夏、pp. 70-72、査読無
- ⑩福原和則・竹内次男・船越暉由、日本生命日比谷ビルにおける村野藤吾の設計過程に関する研究、日本建築学会計画系論文集、第 615 号、日本建築学会、2007 年 5 月、pp. 229-236、査読有
- ⑪笠原一人、村野藤吾の尼崎市庁舎—その公共の形—、地域史研究、第 36 巻第 1 号、2006、pp. 2-25、査読無

[学会発表] (計 2 件)

- ①福原和則・竹内次男・石田潤一郎、京都工芸繊維大学美術工芸資料館が所蔵する村野藤吾の設計図面—アーカイブ整備方法と資料の特徴について—、DOCOMOMO Japan NSC Technology Conference、国立京都国際会館、2008 年 5 月 11 日

- ②角田暁治、谷村美術館における村野藤吾の設計プロセスと空間表現、DOCOMOMO Japan NSC Technology Conference、国立京都国際会館、2008 年 5 月 11 日

[図書] (計 6 件)

- ①石田潤一郎、竹内次男、松隈洋、角田暁治、笠原一人他、村野藤吾建築設計図展カタログ 10、京都工芸繊維大学美術工芸資料館、2008 年、152 頁
- ②笠原一人他、村野藤吾 建築とインテリア、アーキメディア、2008 年、128 頁
- ③石田潤一郎、竹内次男、松隈洋、角田暁治、笠原一人他、村野藤吾建築設計図展カタログ 9、京都工芸繊維大学美術工芸資料館、2007 年、152 頁
- ④石田潤一郎、竹内次男、松隈洋、笠原一人他、村野藤吾建築設計図展カタログ 8、京都工芸繊維大学美術工芸資料館、2006 年、152 頁
- ⑤松隈洋、笠原一人他、近代日本の作家たち、学芸出版社、2006 年、208 頁
- ⑥石田潤一郎、竹内次男、中川理、松隈洋、笠原一人他、村野藤吾建築設計図展カタログ 7、京都工芸繊維大学美術工芸資料館、2005 年、152 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石田 潤一郎 (ISHIDA JUNICHIRO)
京都工芸繊維大学・工芸科学研究科・教授
研究者番号：80151372

(2) 研究分担者

竹内 次男 (TAKEUCHI TSUGUO)
京都工芸繊維大学・美術工芸資料館・教授
研究者番号：30069827

中川 理 (NAKAGAWA OSAMU)
京都工芸繊維大学・工芸科学研究科・教授
研究者番号：60212081

松隈 洋 (MATSUKUMA HIROSHI)
京都工芸繊維大学・美術工芸資料館・教授
研究者番号：80324721

笠原 一人 (KASAHARA KAZUTO)
京都工芸繊維大学・工芸科学研究科・助教
研究者番号：80303931

(3) 連携研究者

角田 暁治 (KAKUDA AKIRA)
京都工芸繊維大学・工芸科学研究科・准教授
研究者番号：60379063